「蛇姓の婬」
――豊雄の成長と〈死〉――

山下愛美

はじめに

上田秋成『雨月物語』から「蛇姓の婬」を取り上げたいと考えたのは、『雨月物語』の中でも「蛇姓の婬」は物語性や怪異小説としての完成度が他の作品から突出した作品であると感じたからである。

「蛇姓の婬」を論評する際に欠かすことのできないものが、「蛇姓の婬」の原典とされる『警世通言』「白娘子永鎮雷峰塔」である。「白娘子永鎮雷峰塔」と比較しながら読まなければ、「蛇姓の婬」の本当の姿は見えないと言っても過言ではない。しかし、「蛇姓の婬」はただの翻訳本ではない。「蛇姓の婬」には「白娘子永鎮雷峰塔」の様々な要素の上に、原典にはない秋成の独創的な世界が構築された意図や主張が色濃く打ち出された物語となっている。残すべきものは残し、捨てるべきものは捨て、更には新しい設定を加えているのである。

「白娘子永鎮雷峰塔」は秋成の中で消化され、洗練されて「蛇姓の婬」が生まれた。芸術的とも言える文章と構成、女主人公の表現、そしてリアルな人間の姿が描かれている。特に興味深いのは、主人公である豊雄が成長して行く姿である。「蛇姓の婬」を、「白娘子永鎮雷峰塔」と比較しながら読み解いてゆきたい。

一　情景描写と主人公の心理

「蛇姓の婬」は、細やかな情景描写から、様々なことを読み取ることができる。特に、主人公である豊雄と情景は密接に描かれている。豊雄は夢見がちな性格である為、理想ばかりが高く、現実をあまり見ずに生きている。それだけではなく、豊雄の家族は豊雄から

現実を切り離し、理想の中での生活を許していたのである。

上記のような豊雄の性質を観点に入れて、情景描写と豊雄の状況にはどのような関りがあるのか、また、物語の中で情景描写はどのような役割を持っているかを見てみたい。

まず、真女児の家についての情景描写を引用してみる。

門高く造りなし、家も大きなり。蔀おろし簾垂こめて、ゆかしげに住みなしたり。

これは、豊雄が夢に見た真女児の家の様子である。この夢を見た豊雄は、「現ならましかばと思ふ心のいそがしきに」と、起床するなり朝食も忘れて真女児の家へ向かう。

では、豊雄が向かった真女児の家についての実際の情景描写を次に引用する。

門高く造りなし、家も大きなり。蔀おろし簾たれこめしまで

ここでは、豊雄が真女児と出会った晩の夢の中で見る真女児の家の情景描写と、現実の真女児の家の情景が同じであることに注目したい。まさに、豊雄が夢の中で見た真女児の家と寸分も変わらない家がそこに建っていたのである。一方、「白娘子永鎮雷峰塔」は、夢の中で白夫人の家へ行くという設定はない。夢で女主人公・真女児の家へ行くという設定を付加した点は物語の不気味さを煽ると同時に、夢（理想）と現実の境界線をぼんやりとさせる効果が考えられる。この夢（理想）と現実の境界線の揺らぎこそ、豊雄自身の揺らぎであるとも考えられる。ここでさらに、家の中の情景描写も引用してみる。

板敷の間に床畳を設けて、几帳、御廚子の餝、壁代の絵なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず。（中略）高杯・平杯の清らなるに、海の物山の物盛ならべて、瓶子・土器撃げて、まろや酌まゐる。

家の中に入ると、豪華絢爛などう見てもただ人の住居ではない、夢のような風景がそこには広がっていた。そのような中、豊雄は夢見心地になり、夫婦の契りを結ぶ約束を受け、金銀を飾る太刀を受け取るのである。しかし、このまるで夢の中であった出来事が、豊雄の災難となって降りかかるのだ。盗人の疑惑をかけられ、再度真女児の家へ向かう豊雄と十人ばかりの武士達。そこで、現実として建っていた真女児の家は以下のように描かれている。

厳めしく造りなせし門の柱も朽くさり、軒の瓦も大かたは砕おちて、草のしのぶ生さがり、人住むとは見えず。豊雄是を見て只あきれにあきれゐたる。

あれ程理想の中で美しく輝いていた夢のような住居は、見るも無残なあばら家であったという現実がそこにあった。豊雄はこの様子を見て、ただ呆れに呆れている。

門押しひらきて入る。家は外よりも荒まさりけり。なほ奥の方に進みゆく。前栽広く造りなしたり。池は水あせて水草も皆枯、野ら藪生かたふきたる中に、大きなる松の吹き倒れたるぞ物すざまし。客殿の格子戸をひらけば、腥き風のさと吹きおくりきたるに恐れまどひて、人々後にしりぞく。豊雄只声を呑て嘆きゐる。

門の中へ入ると、さらに突きつけられるような現実が豊雄の前に広がっていた。人々は思わず後ろへ退き、豊雄は驚きも声にならず、ただ嘆くだけであった。

板敷をあららかに踏て進みゆく。塵は一寸ばかり積もりたり。鼠の糞ひりちらしたる中に、古き帳を立てて

豪華絢爛であった夢のような屋敷の中の現実は、塵が積もり、さらに鼠の糞が散らばっている状況であった。その中に、豊雄の理想の頂点に立っていた真女児は美しい姿のまま座っていた。だが、その美しい容貌は、薄汚れた情景との中では逆に恐ろしさを増長させるものでもあった。

一方、「白娘子永鎮雷峰塔」も許宣の状況に比例して情景が変化して描かれている点では同様である。そういった意味でも、「蛇姓の婬」は原典を忠実に描かれていると言うことができる。例を挙げる為、白夫人の家の描写を引用し「蛇姓の婬」と比較してみたい。

許宣見ると、それは一軒の二階家、正面は両開きの大門で、そのわきに街に面した四枚の長い格子窓、まん中に目の細かい朱の簾を掛け、ぐるりに十二脚の黒塗りの椅子を並べ、名家の山水の古画が四幅掛かっています。

「白娘子永鎮雷峰塔」では、夢の中で白夫人の家へ行く設定はなく、「昼間見たのと同じく、情意濃かなもの」という夢でしかなかった。鶏の声に目を覚ました許宣は、白夫人の家へ向かうと、正面は両開きの大門、街に面した四枚の長い格子窓、まん中に目の細かい朱の簾、十二脚の黒塗りの椅子を並んだ名家の山水の古画が四幅掛かっている普通では考えられない程の豪華な一軒の二階家であったのだ。「白娘子永鎮雷峰塔」でも、やはり女主人公である白夫人の家は豪華絢爛に描かれていることが上記の引用文を見てもよくわかる。

それでは、盗人の容疑をかけられた許宣が、役人と共に再び白夫人の家へ向かう場面の情景描写を引用してみたい。

門前には通りに面した四枚の格子窓、中央が二枚扉の大門で、門の外に高い台階がありますが、板の前はごみ溜めになっていて、一本の竹を横にうちつけてあります。何立らはこのありさまを見て、あきれ返ってしまいました。

「蛇姓の姪」と同様に、みすぼらしい現実の家の様子が表現されている。しかし、「蛇姓の姪」と比較してみると、かなり差異がある。

「蛇姓の姪」では現実の家が崩れている様子をリアルに描いている。軒の瓦は殆ど崩れ落ちているのだ。術をかけられて幻想の中で行った、ある意味理想的な家がこのように崩れているように表現されていることが、豊雄の中の理想が崩れ、現実を直視しなければならない要因の一つとなっているのだろう。また、夢の中で女主人公の家へ行っていない「白娘子永鎮雷峰塔」では、夢と現実の境界は最初から無く、盗人の疑惑をかけられ、再度白夫人の家へ向かった先の光景は突然の変異でしかない。「蛇姓の姪」の夢の中の出来事から、夢のような出来事、そして、目を覆いたくなるような現実という一連の流れは巧妙というより他はない。また、それらの情景描写が同じであり、情景描写をリアルに描くことによって、更に夢と現実の境界線を薄くしたのである。

この場面で、「蛇姓の姪」と「白娘子永鎮雷峰塔」の大きな違いは「白娘子永鎮雷峰塔」は、夢に白夫人の家の様子や出来事を事細かに見るという設定はないということである。この夢の中の女主人公の家と実際に向かった先の家の様子が同じであるという設定、情景描写こそ、より物語の理想（夢）と現実が引き立つのである。さらに言えば、女主人公の不気味さや違和感がひきたつのである。原典にこのような要素を取り入れることから、秋成の優れた構成力を垣間見ることができる。

また、豊雄中の理想に揺らぎがかかり、現実を見ようとする時に、それは情景描写によって表れているのだ。理想を見ていられない状況である時、つまり、豊雄の状況が悪い時に情景描写は醜く描かれていると考えられる。従って「蛇姓の姪」を読む際は、細かな情景描写にも気をつけて読む必要があるのである。

二　豊雄の理想と現実、そして成長と死

次に、「蛇姓の姪」と「白娘子永鎮雷峰塔」の女主人公の描かれ方の相違点を考えてみたい。女主人公が若く美しく、経済力のある未亡人という設定も、女主人公が酒食を饗してもてなし、女主人公から男に引き物を与えるという筋の運びも、原典を忠実に一つ一つ追ってみせている。ここで、作中で女主人公はどのように表現されているのかを比較したい。まず、「白娘子永鎮雷峰塔」の女主人公の登場場面を引用してみる。

服喪の髷を結い、黒髪にやはり服喪の人のさす飾りのない釵や櫛をさし、白絹の上衣に、細麻の裙をはいています。

女主人公の容貌についてというよりは、服装や髪型などが表現されている。一方、「蛇姓の姪」では女主人公である真女児は「年は

廿にたらぬ女の、顔容髪のかかりいと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て」と、年齢や容貌などが特徴的に書かれている。更に、色の良い衣を着ているなどと、読者に女性らしい女主人公の登場を印象付けるものとなっている。

女主人公を人間的に、また女性的に描くことによって、物語は色彩を濃くして行く。また、美しければ美しい程、怪異を起こす時のギャップは大きく、読み手により大きな恐怖感を与えるものとなっている。

鼠の糞ひりちらしたる中に、古き帳を立てて、花の如くなる女ひとりぞ座る。

上記の一文を見てもわかるように、荒廃した家屋の、帳の陰に花のように美しい女が座っている姿という実に不似合いな組み合わせは、思わず鳥肌が立ってしまう程恐ろしい不気味な光景である。この恐ろしい場面は、「白娘子永鎮雷峰塔」を忠実に辿って作られている。

また、女主人公の女性らしい振る舞いや、魅力的な容貌は、主人公の心を操る上で大きな役割を果たしていると考えられる。主人公と、女主人公は出会い、そして恋に落ちる。

「蛇姓の姪」は女主人公が妖怪的な行為を起こすのが少ない代わりに、より人間らしく、女性らしく描かれている。思わず、妖怪であることを忘れてしまうほど、人間の女性以上に女性らしく描かれている。その女性らしさは男性ならば誰でも好感を持ってしまうようなものだろう。豊雄は、生まれつき優しく、「常に都風たる事をのみ好みて」という設定にもあるように、都に憧れる文学青年である。親からは、特に強いるような躾はされず、夢にばかり暮らしていることを許されていた。ある意味、現実から隔離された理想の中での生活を許されていた豊雄の性質は、都風なことを好む上、夢見がちなものであった。このような特徴は、原典「白娘子永鎮雷峰塔」の主人公・許宣にはなく、女主人公が許宣に好意を持つに至る経緯に浅い印象を持つ。一方、豊雄は真女児に出会った際に自分を田舎者であると言いながらも「くるしくもふりくる雨か三輪が崎差ののわたりに家もあらなくに」と万葉集の歌を会話の中に織り込んでいる。豊雄の容貌だけではなく、このような豊雄の一面に、真女児が惹かれたのだろうと認識することもできる。こういった、原典にはない設定は物語により深みを与えるものとなっている。

真女児の女性らしさと、豊雄の性質から、「蛇姓の姪」を読み解くと、夢見がちな豊雄が、どのようにして真女児の世界へ浸かって行くのかが非常にわかりやすく読むことができる。

豊雄を見て、面さと打ち赤めて恥ずかしげなる形の貴やかなる

に、不慮に心動きて、且思ふは、「此の辺にかうよろしき人の住むらんを今まで聞えぬ事はあらじを、此は都人の三つ山詣せし次に、海愛らしくここに遊ぶらん。さりとて男だつ者もつれざるぞいとははしたる事かな」

この場面では、豊雄と真女児が出会い、豊雄は真女児のその美しい容貌や姿に「都の人」であるのだろうという理想を抱く。目の前には豊雄の理想とも言える女性がいる。その理想の女性が豊雄を見て、恥ずかしそうに顔を赤めるという、出会いから夢のような体験をするのだ。「貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん」と、豊雄から真女児に声をかける。「都のものにてあらず、此の近き所に年来住みこし侍るが、けふなんよき日とて那智に詣侍るを」と、都のものではないという答えが返ってくる。しかし、豊雄が傘を貸すと申し出た際に、「其の御思ひに乾てまゐりなん」と濡れた着物をあつい気持ちで乾かすという答えは、田舎の者との会話では成立しない、田舎ものとは違う都人のように洗練された風情のある返答に、都風を好む豊雄は理想の中に益々のめり込んで行くのである。雨は止まず、真女児に傘を貸す豊雄は、家に帰るも「猶俤の露忘れがたく」明け方まで眠ることができなかった。豊雄は明け方に夢を見る。

しばしまどろむ暁の夢に、かの真女児が家はと尋ねいきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、蔀おろし簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。真女児出て迎ひて、「御情わすれがたく待ち恋奉る。此方に入らせ給へ」とて奥の方にいざなひ、酒菓子種々と管待しつつ、喜しき酔ごこちに、つひに枕をともにしてかたるとおもへば、夜明けて夢さめぬ。

豊雄は夢の中で、真女児の家へ向かい、真女児から「御情けわすれがたく待ち恋奉る」と声をかけられる。目を覚ますと、「現ならましかばと思ふ心のいそがしきに」朝食も忘れて家を浮かれ出て行くのである。そして、新宮の里へ行くと、「夢の裏に見しと露違はぬ」真女児の家へまろやの案内を元に辿り着くのである。一章でも述べた通り、まさに夢に見た真女児の家、そして真女児の姿は豊雄の理想、「夢」でもあると考えられる。なぜなら、「現ならましかばと思ふ」というように、豊雄は、これが夢ではなくて現実であったら良いのにと思うと、心が急き立てられて、朝食も忘れて真女児の家へ向かうからである。ここで、夢と実際に向かった先の家が寸分に違っていないことに豊雄は「夢の裏に見しと露違はぬを、奇しと思ふおもふ門に入る」のである。変だなと感じつつも、門の中へ入るのだ。門とは異界の入り口でもあり、現実から更に遠い世界へと入り込んで行くのである。

普通の感覚であるならば、夢と寸分も違わない現実に恐ろしさを

感じる筈であるのが、豊雄は変だなと思いながらも、門に入っていることから、豊雄はその変である現実からすぐに逃避していることがわかる。

ここで、門の中へ入った後の一文を引用してみたい。

高杯・平杯の清らなるに、海の物山の物ならべて、瓶子・土器擎げて、まろや酌まゐる。豊雄また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却て奇しみゐたる。

家の中に入ると、ただ人の住居ではないようで、高貴の家でしか用いない床畳や、几帳、御廚子の餝、壁代の絵などが並んでいた。その夢のような住居の中で、理想の女性と酒を飲みながら、豊雄は「正に現なるを却て奇みゐたる」のだ。まさに夢見心地となる程の、真女児と出会う前の自分の生活の中で想定しえる現実とはほど遠い、夢のような出来事なのである。

花精妙桜が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ひある声していひ出るは、「面なきことのいはで病なんも、いづれ神のなき名負すらんかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生まれなるが、父にも母にもはやう離れまゐらせて、乳母の許に成長しを、此の国の受領の下司県の何某に迎へられて伴なひ下りしははやく三とせになりぬ。夫は任はてぬ此の春、かりそめの病に死に給ひしかれば、便りなき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞ば、彼方も又しらぬ国とはなりぬるをあはれみ給へ。きのふの雨のやどりの御恵みに、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齢をもて御宮仕へし奉らばやと願ふを、汚なき物に捨て給はずは、此の一杯に千とせの契をはじめなん」といふ。

このような夢のような出来事が、現実であることを、頭の片隅ではいぶかしんでいる。しかし、真女児も豊雄もほろ酔い気味となったタイミングで、咲き誇った桜の枝が水面に影を映したようなほんのり美しい顔に、春風のような愛嬌をたたえ、梢の間をくぐり鳴く鶯のようなきれいな声で真女児は豊雄を更に夢の世界へと誘うのである。豊雄が、疑惑の念を抱くと、すぐに、疑うのをやめてしまう程に人間らしく女性らしい美しい真女児が描かれているパターンが多く見受けられる。 真女児が自分の理想に近ければ近いほど、豊雄は進んで真女児の世界へのめり込んで行く。これほどの真女児の女性的な表現の多さは、「白娘子永鎮雷峰塔」にはない。この女らしい表現から見える人間的な真女児の姿こそ、豊雄と真女児を深く結びつける大きな要因の一つとなっているである。

豊雄は家を出て物語の場面は石榴市に移動する。豊雄に受難をもたらした真女児は何処ともなく消えうせた。翌年の二月に、初瀬詣

の群集の中から「都の人忍びの詣と見えて、いとよろしき女一人、丫鬟一人、薫物もとむて」田辺の家の店へ訪れる。見ると、それは真女児であった。「あな恐ろし」と豊雄は家の内へ逃げ込む。そこで、真女児は豊雄に涙ながらに訴えかけるのである。

かねて憐をかけつる隣の翁をかたらひ、頓に野らなる宿のさまをこしらへし。我を捕んずるときに鳴神響かせしはまろやが計較つるなり。其の後船もとめて難波の方に遁れしかど、御消息しらまほしく、ここの御仏にたのみを懸けつるに、二本の杉のしるしありて、喜しき瀬にながれあふことは、ひとへに大悲の御徳かうむりたてまつりしぞかし。種々の神宝は何とて女の盗み出すべき。前の夫の良からぬ心にてこそあれ。よくよくおぼしわけて、思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へ」とてさめざめと泣く。

この真女児の様子を見て、「豊雄或は疑ひ、或は憐みてかねていふべき詞もな」くなり。金忠夫婦は真女児の女らしい振る舞いにすっかり信用してしまう。

ここに一日二日を過すままに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其の志の篤きに愛て、豊雄をすすめてつひに婚儀をとりむすぶ。豊雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛よろこび、千とせをかけて契る

豊雄はついに美しい真女児から逃げる事はできなかったのである。こうして二人は共に暮らすようになり、三月になる。金忠夫婦に薦められて、吉野へ向かうがが「人々花やぎて出でぬれど、真女児が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける」というように、多くの人が着飾っているものの、真女児の美しさに及ぶものはいなかった。この美しさもまた豊雄を虜にするものであったのだ。

しかし、吉野という場で、夢の中で暮らしていた豊雄の目が覚める出来事が起こる。大倭の神社に仕える当麻酒人により、真女児の本性が現れるのである。真女児は怪異を起こし、姿を消す。そして、当麻酒人は真女児を「此の邪神は年経たる蛇なり」と、とうとう真女児の本性は大蛇であると見抜かれてしまうのである。豊雄は地にひれ伏して一部始終を語り、「猶此の妖災の、身禊し給へ」と頼むと、当麻酒人は「今より雄気してよく心を静まりまさば、此れらの邪神を逐はんに翁が力をもかり給はじ。ゆめゆめ心を静まりませ」と言う。この言葉で、豊雄は自分自身を振り返ることになる。

此の年月畜に魅はされしは己が心の正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の羈ならんは由縁なし。御恵いとかたじけなれど、又参りなん

当麻酒人の言葉に「豊雄夢の覚めたるここちに」なり、自身を見直して、現実から逃げずに紀国へ帰ると金忠夫婦に別れを告げ、帰

郷する。このようにして、一歩一歩豊雄は夢から現実に歩み寄って行き、親兄弟に孝行もせずにいた自分を見直そうと紀国へ帰るのだが、まだ処理の終わらない現実問題が残っていた。それは、真女児のことであった。芝庄司の娘・富子に豊雄は婿入りをする。富子は年月の内裏仕えにみがかれたため、立居振舞いをはじめ、姿かたちもはなやかで優雅であった。富子は美しくすべてに満足であったのだが「かの蛇が懸想せしこともおろおろおもひ出づるなるべし」と、蛇の精を思い出してもいた。まだ解決していないこの問題は豊雄の頭の片隅にいつも付きまとっていた。豊雄は、この残された問題から逃れることはやはり出来ず、二日目の夜に富子に真女児が乗り移っていることが発覚する。姿かたちは富子であるが、富子の声は確かに真女児の声であるのである。それを聞くなり、豊雄は恐ろしさに身の毛がよだち、気もぼうとなってうろたえるだけであった。

吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁にしのあれば又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、恨み報ひなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峰より谷に灌ぎくださん。あたら御身をいたづらになし果て給ひそ

このような真女児の言葉に、「只わななきにわななかれて、今やとらるべきここちに死に入りける」と気も失わんばかりの豊雄であった。屏風の陰から登場したまろやを見るなり「又胆を飛し、眼を閉て伏向に臥す。和めつ驚しつかはるがはる物うちいへど、只死に入りたるやうにて夜明けぬ。」と、気を失ってしまう。当麻酒人の言う「今より雄気してよく心を静まりまさば」とは程遠い豊雄の姿であった。

豊雄に課された問題を自力で解決する力はまだ豊雄にはなかった。気を失うことで目の前の現実（問題）からの逃避をはかったのだ。朝になって寝間から抜け出すと、豊雄は舅に助けを求めに行く。そこで舅は祈祷僧を招くのである。だが、祈祷僧は真女児によって命を奪われてしまう。この死は豊雄の内面に大きな影響を与える。顔も肌も赤く黒く染めたような色になって死んでゆくという、普通よりも醜い「死」の姿を見るということは、中世に日本入った仏教思想に繋がるものである。人間の不浄を知ることによって悟りを開くという不浄観（無常観）がここに描かれていると考えられる。豊雄はこの醜い死から目を逸らさず、逆に心を静めたのである。ここへ来て、諦めに近い無常観が豊雄の中に生まれることによって、逃げることのできない現実を自身の中に受け止めることが可能となった。「おのが命ひとつに人々を苦しむるは実ならず」と、真女児のいる、祈祷僧の命を奪った寝間へ一人向かう。芝家の人々は「こは物に狂ひ給ふか」と引き止めるが、豊雄は足を止めることは

なかった。

君何の讐に我を捉へんとて人をかたらひ給ふ。此の後も仇をもて報ひ給はば、君が御身のみにあらじ。此の郷の人々をもすべて苦しめ見せなん。ひたすら吾貞操をうれしとおぼして、徒々しき御心おぼしそ

と媚態を作って話す真女児を見て豊雄は心を惑わすことも、脅えることも、もうなかった。現実と夢の二つの世界を生きていた豊雄であったが、遂に心をひとつにしたのである。

世の諺にも聞ゆることあり。『人かならず虎を害する心なけれども、虎反りて人を傷る意あり』とや。爾人ならぬ心より、我を纏うて幾度かからめきを見するさへあるに、かりそめ言をだにも此の恐ろしき報ひをなんいふは、いとむくつけなり。されど吾を慕ふ心ははた世人にもかはらざれば、ここにありて人々の歎き給はんがいたはし。此の富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連ゆけ」（中略）又立ち出て庄司にむかひ、

「かう浅ましきものの添ひてあれば、ここにありて人々を苦しめ奉らんはいと心なきことなり。只今暇給はらば、娘子の命も恙なくおはすべし」

以前の豊雄であれば考えられないほどの言葉である。真女児に「我をいづくにも連ゆけ」と、現実へ飛び込んでゆく豊雄は、まさに当麻酒人の言う「雄気してよく心を静まりまさば」その姿そのものであった。庄司は豊雄の提案に頷くことはなく、自ら馬を飛ばして道成寺の法海和尚の元へ急ぐ。法海和尚に言われたとおり、豊雄は袈裟を真女児に被せ、力の限り押し伏せる。「力を出して押しふせ給へ。手弱くあらばおそらくは逃さらん。よく念じてよくなし給へ」というのが、法海和尚の指示であった。豊雄は力をゆるめずに押し伏せる。「あな苦し。爾何とてかく情なきぞ。しばしここ放せよかし」と言う真女児に構わず、なお力にまかせて押し伏せたのである。以前の豊雄では為し得ない姿を、ここに見ることができる。

「白娘子永鎮雷峰塔」では、主人公でさる許宣は法海禅師に「出家したい」と申し出るのだが、「蛇姓の姪」では出家について触れることはなく、「豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける」とまとめられている。

私は、「蛇姓の姪」と「白娘子永鎮雷峰塔」の最も大きな違いは、「死」の描かれ方ではないかと考えている。「蛇姓の姪」では、祈祷僧と、富子と、二つの「死」が描かれている。この「死」は「白娘子永鎮雷峰塔」には描かれていない、秋成の創作したものである。富子という存在も「白娘子永鎮雷峰塔」にはない。真女児を封印し、物語は大団円に終わると思われたのだが、「庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ」と、ここで富子の死が語られるのである。

真女児という現実を打ち破ったが、それだけでは終わることのない、富子を病気で失うという人生の無常さを描く為に富子という人物を物語に付加したのではないのだろうか。仏道とは、不浄な物を観る修行を指すのだが、出家をせずとも得ることのできた豊雄の無常観が、「蛇姓の婬」では描かれているのだ。

おわりに

「蛇姓の婬」では、全編を通して、豊雄が少しずつ成長して行く姿が巧妙に描かれている。見事としか言いようのない原典を改変させ秋成が新しく創作した人物設定により、物語をスムーズに読み進めることができる。執念深い蛇の化身・真女児と出会い、恋に落ち、対面して、乗り越えて行く様子がスピード感を持って描かれている。

夢の中で働かずに暮らす豊雄は、現実を見ないで生きてゆくことの許された存在であった。夢見がちである豊雄は、理想そのままの女性・真女児と出会い、恋に落ちる。しかし、自分の夢や理想に思えた筈の真女児は、実は最も逃げたい現実である事に気が付くのである。豊雄に依存し、追い続ける真女児こそ、親兄に孝行もせずに夢の中だけで暮らす豊雄そのものであると感じられる。言い換えると、夢の中で暮らしていた豊雄と真女児の出会いは、豊雄自身の現実を目視する契機となったと言うことができる。真女児に出会い、それまで目を逸らすことの許されてきた現実が、豊雄自身に降りかかる災難という形になり、逃げることの許されないものとして豊雄の前に立ちはだかるのだ。秋成の巧妙な設定によって、少しずつ成長して行く豊雄に読者は引き込まれてしまうのである。

しかし、この作品の面白い部分はこれだけではない。真女児の起こす怪異は恐ろしく、怪異小説として見ても読者を震え上がらせる程見事なのだ。

豊雄への執着によって生きた真女児と、俗世への欲を無くした豊雄と、結末に向けて二人の内面は大きく違うものへと変化して行く。さらに、「白娘子永鎮雷峰塔」には無い二つの「死」によって描かれた無常観こそ、「蛇性の婬」の隠された大きな主題なのではないかと感じられる。なぜなら、真女児によりもたらされたこの二つの「死」こそ豊雄の成長に欠かすことのできない重要な要素だからである。「蛇性の婬」はただの怪異小説ではなく、こうした無常観を様々な場面から読み取ることができるのである。このようなことから、『雨月物語』の中でも「蛇性の婬」は特異な作品であり、読むものに深い影響を与える作品と言うことができる。

文中で引用した『雨月物語』のテキストは、高田衛校注・訳の小学館「日本古典文学全集」（昭和四十八年二月二十八日発行）本に拠った。

また『警世通言』「白娘子永鎮雷峰塔」の日本語訳引用は、「中国古典文学大系」25『宋・元・明通俗小説選』（平凡社、昭和四五年十二月五日発行）松枝茂夫訳に拠った。

（二〇〇七年　卒業）